

On-Air 3000 ユーザーレポート

株式会社山陰放送 様

On-Air 3000



ラジオのメインスタジオを On-Air 3000 で更新



株式会社山陰放送
技術局 放送技術部
田淵 雅己 野坂 弘行

音声卓更新のポイント

弊社ラジオ・ワイド生放送のメインスタジオである第5スタジオの音声卓を22年ぶりに更新しました。このスタジオでは、365日・朝から夕方までフルに生放送をしていて、卓に付くオペレーターも多数います。また、報道スタジオも併設しており、一つの音声卓で2つのスタジオを運用しています。音声卓更新のポイントは、

1. 操作性が優れている事。
2. ワンマン生放送（初の試み）などの展開が容易であること。
3. 報道スタジオ（隣スタジオ）との連携が容易であること。
4. 機能面で過不足なきこと。

でした。これまでのアナログ卓からデジタル卓への切替となりましたが、On-Air 3000はGUIが充実していて、これまでのアナログ卓と大きな違和感なく操作できる魅力がありました。また、番組・担当者毎にパラメーター設定を保存でき事故防止・効率的運用が図れるようになりました。On-Air 3000はモジュール構成であるので、フェーダーモジュール1つをスタジオ側に設置する事でワンマン運用が可能となり、報道スタジオとの連携も、カフのON/OFF信号

をOn-Air 3000のGPIOに割り付ける事で可能となりました。「対象は生放送」「On-Air 3000は国内1号機」「スチューダー製品は納入実績無し」「アナログ デジタル卓」といった、慎重の上にも慎重を重ねなければならなかった取り組みでしたが、スチューダー・ジャパン担当者との100回を越すメールのやり取り、On-Air 3000のパフォーマンスの高さは非常に魅力的であり、基本的にラジオ仕様のため機能面でも過不足ない点などを考慮した上で、最終的には実機を確認し、導入することとなりました。また、たくさんの回線を自在に扱えるデジタル音声卓の利点を活かし、回線ルーター機能を音声卓で運用する試みも取り組みました。

試運転とトラブル

今回のスタジオは、前述の通り弊社での放送の生命線であり、稼働開始したら絶対に運用のトラブルを避けられないポジションです。そのため試験は徹底的に行い本稼働開始の判断をしました。On-Air 3000は既に海外では稼働されているということでしたが、日本での1号機であること、また、納入時点では処理する音声回線と制御信号数が世界で一番多い仕様であることもあり、基本動作はデモ機などで確認していたものの弊社での運用に対応できているかを綿密にチェックする必要がありました。その結果、正式運用は当初予定より3ヶ月遅れとなりました。運

用開始前の試験中に、インサクションのON/OFFを繰り返し動作させるとDSPがフェイルする問題が生じたためです。スイス本社の技術陣も巻き込んだ対策となりましたが、当社によるソフトウェアの改修及びFirmwareのパッチにより対応できました。現在、正式運用から3ヶ月以上経っていますが、トラブルなく運用できています。尚、DSP・入出力CARDにはリダンダント機能がないため、EMG機能として持ち出し用アナログ音声卓を据え置いています。

TELシステム

TELシステムについても、スチューダーのTEL-ASSIST IIに更新しました。大きな特徴として、On-Air 3000のGPIOと連携を取ることで、「複数回線の切り替え」「HOLD LINEへの切り替え」などをフェーダー接点のみで制御でき、オペレーターの負荷軽減が図られています。

最後に

今回の更新は音声卓の入れ替えだけではなく、「IDF・中継架の見直し」「代替スタジオ確保」「サブ・スタジオ環境整備」「報道スタジオ機器一新」など取り組み範囲が広範囲になりましたが、スチューダー・ジャパンの担当者をはじめ、工事担当のニューテレス・テクノの川島さんグループの熱心な取り組みにより非常に満足できるものとなりました。